

陰陽師 創譚ノ巻

生野の猫梅酒

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

時は平安、人の営みと魑魅魍魎が隣り合わせに息をひそめる雅な時代のこと。

平安京は桜の木の下に、法術を操る老法師が現れるという。女童と驚、それに蛇を連れたこの法師は、法力をもって人々の悩みを立ちどころに解決してしまうともつぱらの噂である。

だがある日、その法師の解決したはずの怪異あやかしについて、安倍晴明に相談が持ち寄られ

希代の陰陽師、安倍晴明と、その友である笛の名手、源博雅。

二人の前に現れたのは、桜法師と呼ばれる陰陽師だった。

※この作品は夢枕獏氏の小説『陰陽師』の二次創作です。

※こんなあらすじですが、別に敵対する訳ではないのであしからず。

目次

桜法師・上	1
桜法師・下	22
続、むしめづる姫・上	37
続、むしめづる姫・下	53

桜法師・上

桜が、舞っているのである。

八分咲きの満開であった。薄桃色の花びらが、枝にみつしりと咲き誇る。桜の醸し出す不思議な香りと雰囲気が、庭から縁側に向かい届いている。

ひら、

ひら、

ひら、

風もなく枝より離れた花びらが、午後の柔らかい日差しの中に躍った。

春の初め——

長い冬が終わり、暖かい気候がやって来ていた。穏やかな日差しが降り注ぎ、天がこの時期を言祝いでいるように思えてしまう。

土御門大路、晴明の屋敷。その庭は、常と変わらずまるで春の野山をそのまま持ってきたかのよう。

桜、菊、躑躅、水仙、鈴蘭——そして花々と戯れるかのように、蝶がひとつ、ふたつ、

みつつ……

それらをよく見れる縁側にて、安部晴明と源博雅は、季節の山菜を肴に酒を酌み交わしているのであった。

「それにしても、桜とは不思議なものだなあ」

博雅が言った。桜の気配ごと杯の酒を飲み干し、酒精に酔う。

いや、この男はきつと、散りゆく満開の桜の姿を見て、吸つて、酔っているのだろう。「何がだ、博雅？」

晴明が問う。

白の狩衣姿で、柱に背を預け、杯を指に引っかけようとしている。その赤い唇には、あるかないか程度の微かな笑みが浮かんでいるようにも見えた。

「昨年、一昨年、そのまた昔——桜はいつも変わらずそこにあるし、数え切れぬほどに眺めてきた。だというのに、どうして桜はいつもおれの心を乱れさせるのだろうかと思うてな」

「ほう」

「毎年この光景を見て、その美しさを忘れぬよう心に留め置いている。なのにこの季節になるといつだって、まるで初めて桜を見たかのような面持ちになってしまうのだよ」

「なるほど」

「人の心に、飽きるという感情があるのは承知している。なのにどうしてか、おれの心には桜を飽きるという事そのものが存在していないかの様なのだよ……」

「それもまた、一つの呪だな」

「なに!？」

「そうだ。桜とは、人の心を汲み取る因果の花よ——」

「いや待て、清明よ。呪の話を持ち出されてはかなわん。この心地よい気分までどこかに行つてしまいそうだ」

博雅が止めた。酒を飲む手が止まっている。

けれど清明は、気にせず話を続ける。

「この天地を巡る気には、因果が存在する。理由なく生まれ出でるものではなく、何某かの行いの後で現れぬ結果もない。桜もまた同じだ」

「分からぬ。それとおれが桜を飽きないことになんの意味があるというのだ」

「花が咲くまでの因果は、季節を通して複雑に絡み合い、結ばれ、続くものだ。例えば関係のない物事だろうと、実はどこかで繋がっているのさ。ほんの少しの風が、数日もすれば嵐を運ぶかもしれないようにな」

「それはつまり——」

「つまり?」

博雅がわずかに言いよどんだ。

「毎年桜を見るおれの心もまた、同じはずがないというあたりまえのことではないか」

「その通りだ、よくわかっているではないか。存外、そのあたりまえを認識できない人間は多いものさ」

「そういうものなのか」

「そういうものさ」

「ふうん。おまえに化かされたような気持ちはあるが、此度はなんだか、普段よりもおまえの話が理解できたような気がするよ」

呟いて、博雅はもう一度酒を乾した。空になった器に、無言で酌をしていた式神の蜜虫が瓶子から酒を注ぐ。

清明は、庭を眺めていた。その赤い唇には、心なしか先ほどよりも深い笑みが浮かんで見えるように見えた。

桜の花びらが散り、舞い、落ちていく。春らしい強い風が吹けば、途端に風にあおられ鮮やかな蒼穹に吹かれていく。それと共に、桜が発するなんともいえない香りが鼻に届く。

儂い無常を感じさせるその光景を、清明と博雅はしばし無言で眺め合う。

「桜と言えば博雅よ、お主は桜法師なる人の事を知っているか？」

杯を静かに置いた晴明が、不意にそのような事を口にした。

「おう、桜陰陽師殿か。知っているとも、ここ二年程の間に名を高めた陰陽師の事である。なんでも朱雀大路の桜の下で女童と共にいて、占いや、祓いなどの仕事を請け負っている方とか」

この時代、本来ならば都の陰陽寮に属する正式な陰陽師以外は、律令でその活動を禁止されている。

だが現状ではその律令も形骸化しており、いわゆる民間陰陽師として、かつて晴明を試し返り討ちにされた智徳法師や、かの播磨はりまの道摩法師こと蘆屋道満あしやなどがいるのであり、話題になった人物もその一人であった。

「そうだ、その方だ。さすがに女が関わるとなれば、博雅の耳にも届いておったか」

「こら、馬鹿にするでないぞ晴明。それではおれが女好きのようではないか」

「そう聞こえたか」

「聞こえた」

口を尖らせ、不平を露わにする博雅。

無骨な男であるはずなのに、この男がするとどうにも愛嬌を感じさせる仕草である。

「そう拗ねるな博雅。それで、おまえはどこまでその人の事を知っているのだ？ おれ

も噂は耳にしているのだが、直接会ったことはないのだ。どのような方なのか、おまえ

の口からも聞いてみたい」

そう言われ、博雅も静かに杯を置いた。

「おれが知っていることはだな——」

そうして博雅が語りだしたのは、次の様な事であつた。

二

件の桜法師、あるいは人によつて桜陰陽師とも呼ぶその老人が最初に現れたのは、かれこれ二年程も前であつた。

ましな呪いやトを能くし、うらない安い錢で恋愛相談から失せ物と人探し、果ては妖の類に困つてゐる者の依頼にまで乗る。それらがほとんど常に成果を發揮しているという事で、都においていよいよ評判になりつつあるという話なのだ。

この桜法師、名を枝垂しだれというらしい。五十代も半ばの老法師であり、古ぼけた黒い装いに身を包んでゐる。老齡ながらにしっかりと腰を伸ばした、まるで大樹のような男だつた。

さて、この枝垂なる人物、まず朝になると、必ず朱雀大路の大きな桜の下に居る。それだけではなんとも味気ない話だが、懐から取り出した椅子と机、そして几帳の形に切り取られた紙に何やら呪を唱える。

すると、たちどころにこれらが本物の木組みとして現れ、簡素な相談所として成り立

つのだ。

これだけで、人々にとっては大変な法術である。

そのうえ、枝垂には常に一人と二体の従者が居るのだ。これらがまた奇怪な者どもであり、衆目を集めた。

その内訳は、大鷲、六尺にも及ぶ大蝮まむし、そして十七、八ほどの小柄な女童めわわである。

この者達は常に枝垂の傍に控えており、人が近寄つても襲わない。よつほどの害意が無ければ、触られても怒らない。

次第に人々が朱雀大路を通い出し、付近に人が集まつて来ると、その日の枝垂の生業が始まる。

例えば、やって来た誰それが家の中での失せ物について訊ねてみれば、

「では占つてみましょうか。わしの手にあなた様の手を重ね、失せ物を強く思い浮かべてください」

取り出した大きめの鏡の上に、まず枝垂が手を置き、その上に誰それが手を重ねる。

そうして枝垂が二言三言呪を唱えてから手を離してみれば、鏡には失せ物のある場所が映っているのであった。

「ここに映つた場所を探して御覧なさい。もし見つからなければ、お代は返金いたしません」

その言葉に従い、鏡に映りたる場所を探してみれば、果たしてそこには失せ物がある。枝垂の法術は、確かに効果を發揮していた。

その的中率、百のうち九十九は当たると言われる。仮に運悪く見つからなくとも、申告すれば代金は返却された。

また、狡い者が、失せ物を見つけたのに見つからなかったと、嘘を申告しても、

「ならば試してしんぜましよう。我が風丸かざまるは、嘘を見破りその骨肉諸共に啖くらう大鷲ですがいかがか？」

そう告げられてしまえば、どうしようもなかった。誰でも、炯々と光る猛禽の瞳と、立派な体軀を見せつけられれば怖気づく。そこで引かなかった人物も、実際に風丸と呼ばれた大鷲が翼を広げれば、それだけで突風が巻き上がり恐ろしい。そうなればもう、欲目を出すこともできない。

或いは、怪異に悩まされるのであれば、話をうかがい直接妖怪やなにがしかの退治、解決を行うこともある。そういう時は、夕方ごろまで占いを行っている枝垂ではなく、蝮を連れた女童が依頼者に着いてくる。

この女童、名を桔梗ききょうというらしい。

薄い藤色の簡素な着物を着た、白い肌の少女である。黒い艶やかな髪には竜胆りんどうを模した髪飾りを付けており、涼しげな目元を持つ美しい顔立ちであった。

この女が、主に怪異の解決に参上するのである。

「ははあ、つまりはこれこれこういう事でございますな。安心ください、即座に解決できるものでござります」

大抵の場合、問題の場所に赴き周囲を調べ、依頼者から詳しい事情を聞けば桔梗からはこのような返答が帰って来る。

顔には笑みが浮かんでおり、こう言った時は宣言通り、間違いなく解決する。

しかしその解決方法が、また面白い。

使うのは、連れて来ている蝮と、懐から取り出した筆^{ひちりき}に呪符。このうち呪符を蝮に啜えさせると、桔梗は呪を唱えてから筆を吹き始めるのである。

この筆の腕がまた絶妙のものらしく、するすると天へと昇る音色が、光や闇と戯れているかのように感じられるらしい。

桔梗が唱える呪も奏する曲も時によって違うが、とにかく筆より零れる音に従い、長い体をくねらせて蝮がどこかへ消えて行く。そうして筆が止む頃には、蝮もまたどこから戻って来る。

この時にはもう蝮の啜えていた呪符も消えていて、それ以降は依頼者のところに怪異は起こらないという話なのである。

また、奇妙なことに、この桜法師を二人見たという話もある。

正確には、夕刻、ある者の依頼で仕事終わりの後に、桜法師自身が怪異の解決に赴いた時の事である。

その時は京の最も東、東京極大路のさる屋敷に赴いていたという。

なのだが、この後四半刻もしない内に、誰それが正反対の西京極大路でその姿を見たというのである。

当然、本来ならばありえない。時間的に、人がそれだけの間に京を東西に横断することは、不可能であるからだ。だが、前者は確かに頼まれた怪異の解決を果たしており、後者は例の従者たちを連れている。となれば、本人以外にあり得ないはず。

困惑し、興味を持った者は、この事実の真偽を当人の枝垂に訊ねてみたのだが——
「さて、どうでございましょうか。案外と、この枝垂めが本当に二人いるやもしれませぬぞ」

にいつと笑い、明確な答えを返さない。だが否定もしないのである。

そう言う訳で、人々はこの者ならばこういう事もあるかと得心してしまい、また名前の枝垂と常に桜の下に居ることから、いつの間にか桜法師やら桜陰陽師やら呼ばれている次第なのであった。

三

「と、これがおれの知っていることだ。この京には、なんと不思議な人の多い事よ」

「そうだな」

「おまえもだぞ、清明よ」

話し終えた博雅が、杯に注がれていた酒を乾した。唇を舐めて、その残り香まで味わい尽くす。

そこに再び蜜虫が笑いながら注ぎ足し、さらに博雅は飲み干した。

清明もまた杯の酒を乾して、肴の山菜を軽くつまんだ。それから、博雅を見やった。

「やはり、おれの聞いた噂ともそう違わぬな」

「ほう、おまえも桜陰陽師——枝垂殿のことに興味があつたのか？」

「まあ、同業者として、多少の興味が無いと言えば嘘になるが——それよりも仕事の方
「や」

その言葉に、博雅がつまらなそうな顔をした。

「なんだ、いよいよおまえにも面白い話ができると思うたのだが」

「そういうおまえはどうなのだ。やけに詳しく知っていたではないか。まさか桔梗という女子に懸想でもしたのでは——」

「違う、からかうでないぞ清明。実はな、しばらく前の昼に、おれも枝垂殿のところへ足を向けたことがあるのさ」

「それはまた何故だ？」

「笛さ。枝垂殿の連れている式神、桔梗殿の筆^{ひつりぎ}を聴いてみたいと考えたのでな」

「ほう、おまえにも、その従者の正体が分かったか」

「当たり前だ。これでも、いつもおまえの式神を見ているのだぞ」

そう言つて、博雅は隣で酌をしている蜜虫に目線をやった。唐衣をまとい、藤の香りを漂わせている彼女は、清明がよく用いている藤の精の式神である。

ともかく、博雅はその桜法師の連れている式神、桔梗の吹く筆^{ひつりぎ}の音を聞きに朱雀大路に行つたらしい。

それも、徒歩で従者も付けずにのようだ。この男、殿上人でありやんごとない血筋に連なる者でもあるはずだが、そういうことを平気でやれる気負わなさがある。

「だが、結局は聴けなかった……何故だか分かるか、清明よ？」

「さてな。なにかお主がつれないことでも無自覚に言つてしまったか——」

「そうではない。どうやら桔梗殿、おれの事を耳にしていたらしくてな。これをおれが言うのは恥ずかしいのだが——」

博雅は正面に座る清明をみた。その瞳はまるで、「笑うなよ、清明」と念を押しているようだ。

その清明は特に唇に浮かべた微笑を崩すことなく、博雅の話の続きを待っている。

そして、その時のことを思い出したのか、気落ちした様子^{ようす}の博雅は、微妙に声音を變

えると、告げられたことを復唱した。

『天下の笛の名手である源博雅様の前では、我が筆箒もとんだ恥さらしでございませう。申し訳ありませんが、とてもお聞かせ出来たものではございませぬ』——などと言われてしまったのだよ」

「それは残念だったな。しかし事実ではないか、そう謙遜することもあるまい」

無骨で、風流で、そしてどこもない可愛げのあるこの男が、笛を筆頭に樂の音に愛された者であるというのは、京に生きる貴族や、耳ざとい者であれば当然知っていることであつた。

清明は、それを言っているのである。

「笑うな、清明」

「笑つてないさ。それでは、おまえは筆箒を聴かずに帰つたということか」

「無理強いをするのも申し訳なくてな。枝垂殿も口添えしてくれたのだが、どうしても応じてはもらえなんだ」

「なるほどな。やはりそういう事であつたか」

清明が得心したような声をあげた。

「なんだ、何がそういうことなのだ」

「まあ待て、そう焦るな。先ほど言つたらう、仕事の話であると」

「言つていたな。その枝垂殿について何か依頼を受けたという事か？」

「そう言う訳さ」

「どういったものか、聞かせてはくれぬのか？」

「知りたいならば話すぞ。口止めはされたが、おまえならば問題もあるまい」

「なら、聞きたい」

ずいど博雅が身を乗り出した。常にはない好奇心が、純真な瞳に輝いている。

どうやら、よほど筆策を聴けなかったのが堪えているらしい。

「よし」

頷いた晴明は、一口酒を飲むと、ゆるりと事の次第を話しだすのであった。

四

たらはなのもうまで

橘 諸正たらはなのもうまでという男の屋敷は、六条大路の東の方に構えられていた。

この男、大層な女好きで有名な男であった。陽も暮れて早々に屋敷を抜け出し女の下に通つたと思えば、月の昇つた時には別の女を訪れ、さらに明け方にはまた別の女と寝ているという。諸正もこれを肯定したことはないものの、積極的に否定したこともない。

確信犯である。平安の世において複数人と関係を持つ貴族は決して少なくはないが、それにしても度を越している。だが家人たちがそれを咎められるはずもなく、また当人

が周囲の視線も意に介さないとすれば、歯止めが利くはずもない。

そんな諸正の屋敷に異変が起こったのは、十日も前の話だ。

朝、主人である諸正が中々寢床から出てこない。部屋の外から声をかけても起きる気配はなく、よくよく耳を澄ませばおかしな呻き声が聞こえてくる始末。

不信に感じた家人が入ってみれば、なんと諸正の顔に黒い何かがへばりついているではないか。まるで生きているかのように蠢き、彼の呼吸を封じているのだ。

異様な光景である。

「あなやー！」

叫び、思わず腰を抜かしかけた家人であつたが、主人の危機に身体が動いた。黒いそれを手掴みして引き剥がし、陽の当たる庭の方へと投げ捨てたのである。

落ち着いてよく見れば、庭に捨てられたのは黒い長髪だつた。今も生きているかのうに地面を這い、諸正の方へと来るではないか。

これにはついに、勇敢だつた家人も腰を抜かした。

「だ、誰ぞ此処へ——」

震える声で他の者をどうにか呼び出し、持ってこさせた松明で髪を焼いたのである。炎の中で踊る黒髪は例えようもなく不気味で、執念深く諸正を害そうとしているように見えるから堪らない。

煙に漂う異臭で目が覚めた諸正は、ことの次第をきいてさすがに蒼褪めた。燃え残った黒髪を一筋手に取り、いよいよ震えだしてしまふ程に。

「もしやこの髪は、蒼の……」

それが諸正がかつて通っていた女の名前であると分からぬ者は、この場になかつた。

すぐにくだんの女の屋敷へと使いをやれば、しばらく前に諸正とえんを切られ、以来艶やかだった髪を切つてしまひ寝込んでいるという。特に今朝は頭を振り乱し、

「熱や……熱や……」

と魘されていたというではないか。

いよいよただ事ではない事態だった。

だが怪異はこれだけで終わらなかつた。その日の昼には諸正の屋敷の至るところで蛇が発生し、夜には諸正自身が高熱を出して倒れたのだ。まさか女の沙汰で呪われるなど人様にいえるはずがない、などと強がった諸正もこれには参つた。

「誰ぞ、怪しむことに詳しい者を連れて参れ」

この言葉を皮切りにして、家人たちはすぐに動いた。

そこで呼び出されたのが例の桜法師こと、枝垂であつたのだ。

桜の木の下で話をきいた老法師は、いつものように、蝮を連れた女童の桔梗を屋敷へ

と寄越した。

桔梗は諸正の屋敷の前に立つなり、小さく呟いた。

「これはまた、凄まじい情念の塊ですね」

屋敷の敷居を跨ぐ前に一瞥した彼女は、にいと笑った。懐から呪符と鏡を取り出しながら家人の後へと続き、なにごとか呟きながら門を通り抜けた。家人にはもちろん意味など分らない。

「いつたいなにを？」

「呪詛避けの呪いでござります。この呪詛、生易しいものではありません故、この屋敷の外よりやって来る女にも害意を向けてしまっているのです」

「なんと……」

桔梗の返答に家人は恐れおののくばかりだった。

ともあれ、すぐにも病床に伏せた諸正の前へと通されたという。ほんの一晩の間に骨と皮ばかりのようにやつれた諸正は、縋る様に桔梗を見るより他にない。

その様子を見て、いよいよ桔梗は得心したように頷いた。手に持った鏡を諸正へと向け、これを覗き込むように言う。

素直に従った諸正は、すぐに驚いたように身を引いた。

「そ、それは……!?!」

「見えますか、諸正様？ この鏡に映った、あなた様を取り巻く黒い霧こそ、あなた様を呪い殺さんとする者たちの情念なのです」

「あな恐ろしや……これが、全て……」

「そう、全ては、あなた様と関係を結んだ女性たちからの怨念でござりますれば。よほど恨みを買ったのでしよう、これだけの念が凝り固まることなど早々ありません」

「な、なんとかならぬのか！」

「一時的に矛先を逸らすことは可能でしょうが……もつて数日でしよう。その間に、あなた様の手で関係を一度綺麗にしてくる必要があるかと」

「ぬう……かくなるうえは、仕方あるまいか」

大層な女好きで知られる諸正にとって、桔梗の提案は身を切るようなものである。

だが背に腹は代えられない。このまま呪い殺されるよりはまだ良いだろう。仕方なしに桔梗の提案に頷き、ひとまずその場しのぎの厄払いを執り行ったのである。

五

「そうして諸正殿は次の日には復調し、その足で関係を結んだ女性たちへ話を付けにいったそうだ。これすら三日かかったと聞いたが、その後はなんの怪異あやかしも起きなくなつたとか」

「それはまた……うむ、凄まじい話だな。かつて七晩かけて帝の下へ向かった彼女とい

い、三度生まれ変わってなお男を追った彼女といい、女性の執念とはなんとも強いことよ」

かつて出会った怪異を思い出したのか、難しい顔で博雅が頷き、酒を口に含んだ。

「しかしだ、晴明よ。ならば諸正殿の話はすべて解決したのではないか？ どうしておまえの力が必要にされるのだ」

「実はな、この話にはまだ続きがあるのだ。事態が一段落したは良いが、諸正殿、どうにも自らの欲を抑えきれなかつたようだな——」

「まさかとは思うが」

「おう、そのまさかよ。その後の経過を伺いに来た桔梗殿を相手に、どうも歯止めが利かなくなつてしまつたらしい。強引に寝屋へと連れ込んだ挙句、連れて来ていた蝮の威嚇に怯んだところを逃げられたとか。さらに翌日からは収まつたはずの怪異が、またも発生するようになったとなれば困つたことにもなるう」

「まさか桜法師の仕業か!？」

「分からぬ。だがそう考えるのが自然だろうし、諸正殿も同様らしい」

「なるほど、それで口止めをされたという訳か」

「さしもの諸正殿も自らの浅慮さを恥じたのだろうさ。女好きが高じて起こつた怪異の解決直後に、またも過ちを繰り返してしまつたのだからな。だから事を荒立てない内に

解決してくれと、今朝おれのところに来たわけだ」

話によれば屋敷中に巨大な毒蛇が這いまわり、雲も動かぬ月夜に風が吹き荒れ物が飛ぶのだという。諸正自身も皮膚がまるで岩のように硬くなり、日常生活すらままならぬようになってしまったらしい。

かといつて桜法師の下に人をやってみても、まるで凶つたかのように誰もいない。この二年の間にいつもの場所にいなかったことなぞ、滅多にないのだ。

途方にくれた諸正は、ついに土御門の晴明を頼つたという訳だった。

「で、おまえは行くと答えた訳か」

『今日は源博雅様と飲む予定ゆえ、その後になりますがよろしいですか?』と問うたが、それでも構わぬと言うたのでな。この後にも向かう予定だったが、どうだ、おまえも来るか?」

「むう……このまま帰るのも味気ないが、しかしな」

「まだ酒が飲み足らぬか。案ずるな、戻ってきたらまた一杯やる予定だ」

「そういう訳ではない。ただおれが共に行っても良いかと悩んだだけだ」

「構わぬさ。向こうも承知だろう」

「む——」

「どうだ、ゆかぬか?」

「う、うむ」

「ゆこう」

「ゆこう」

そういうことになった。

桜法師・下

蜜虫の先導する牛車に揺られ、諸正の屋敷へとついた時には、もう太陽は傾き夜の帳が降りようとする頃だった。

入口には既に諸正が精明たちの到着を待っていた。牛車が止まると同時、二人の方へと駆けよつて来る。どこかぎこちない動きは、皮膚が硬くなっていることの証左だろうか。

「精明殿、よくぞ来てくれました。博雅様も、ありがとうございます。」

「それより諸正殿、さっそく屋敷の中を拝見しても?。」

「はい、どうぞご覧ください。」

神妙に頷き、諸正の案内で精明と博雅は屋敷の内部へ通された。

まず、風が強い。門の外と内で世界が違うかのように、強風が吹き荒れている。建物がみしみしと音を立て、風に吹かれた木の葉がつむじを巻いて空へと昇る。

加えて、家人が庭を忙しく駆け回っていた。手元をよく見れば、火箸の先に蛇を捕まえては袋の中へと入れているのではないか。破裂せんばかりに膨らんだ袋の中には、果

たしてどれだけの蛇がいるというのか。

明らかに尋常な光景ではなかった。

これを見て博雅は一步後ずさりかけたが、清明は口元に涼し気な微笑を浮かべたままである。

「なるほど、これなら話は早いですね」

「本当なのか、清明？」

「ええ、おそらくすぐにでも片はつくことでしょう。博雅様はどうぞ、そこでご覧くださればと」

他人の目があるとき、清明の博雅への態度は丁寧なものになる。

清明は真つすぐ庭の隅へと向かうと、そこにあつた木の幹へと手を当てた。なにやらの呪を唱え、静かに木を叩いた。

「もう、気は済んだでしょう。主もおそらく心配しておられますよ」

低く呟いたその時だった。木の上からなにか細長いものが落ち、また頭上からはけたましく翼を羽ばたかせる音がした。

地を見れば落ちたものは六尺にも届こうかという大蝮であり、空を見上げれば夕陽の空に大鷲が舞っているのが分かる。

どちらも、桜法師の連れてくる二体の従者に他ならなかった。

「清明、これは——」

「おおかた、風の方は大鷲が引き起こし、大量の蛇はあの大蝮が呼び寄せたものだろう。どちらも相当に力の強い式神ぞ、その程度はできようさ」

「そういうことだったのか……」

「だが、最後に一仕事残っている」

既に清明の口調は元に戻っていた。博雅はそれを気にすることはないし、諸正は怪異の原因が分かったことに気を取られてばかりだった。

その諸正の背に清明は近づくと、そつと掌を当てた。

「せ、清明殿?」

「動かないでください。残る最後の怪異を今から解決させます故」

安心させるように声をかけ、清明はさらに呪を紡いだ。低く、不思議な抑揚で唱えられ、十秒ほどもしてから諸正の背を叩くように手を動かした。

そこで諸正の背中から、一枚の桜の花びらが落ちたのである。ひらひらと地面に舞い落ちる花弁を清明が手で掬い取った。

「これでもう大丈夫でしょう。お体の具合はどうですか?」

「お、おお……! なんともない、元のように動きますぞ!」

「それは良かった。無事に解決して何よりですよ」

「ありがとうございます、清明殿……なんとお礼を申せばよいのか」

微笑んだ清明は微笑を浮かべ、天へと向けて手のひらを掲げた。その上には先ほどの桜の花弁が置かれている。

「陽が沈むが如く、鳥が巢に帰るが如く、雨が雲となって天に帰るが如く、汝もすみやかに汝が主がもとへ帰るがよい」

目を閉じ、静かに呪が紡がれた。

するといきなり突風が巻き上がり、清明の手のひらにあつた桜の花弁は空へと舞つたのである。

夕焼けの高いところまで舞つた花弁は、空で待ち構えていた先の大鷲の羽毛へと綺麗に着地した。獣の鉤爪にはこれまた大蝮がしっかりと掴まれており、残照の空へと風のように消えていったのだ。

「これですべて終わった、のか？」

「まあ、そのようなところだな。それから、諸正殿」

「はい」

「今回はこの程度で済みましたが、これから如何によつてはこの清明でも手に負えぬ呪詛になるやもしれませぬ。どうか努々、自らの行いを省みますよう忠告させていただきます」

「あ、ああ……さすがのわたしもこれには懲りました、今後はもう少し慎みを持つとします。桜法師については、何もなかったことにさせていただければと……」

「ええ、互いのためにも、それが一番よろしいでしょうね」

すっかり夜の帳も落ち、銀色に輝く月が朧な光を放つ時刻だった。

清明と博雅は諸正の屋敷から土御門の屋敷へと、ゆるゆると帰る途中である。

「因果とは恐ろしいものだな、清明。積もり積もった因果の山が、このような事を引き起こすとは」

「だから言っただろう、世の中は全て因果によって回っているのだと。一見関係のない出来事とて実は繋がりがあ、また当たり前のことだから人は中々気が付けない。今回の諸正殿のようにな」

「ふうん……」

「そういうものさ」

暗闇の中、清明が微笑んだような気配だけが伝わってくる。

と、不意に、牛車が止まった。揺れが収まり、穏やかな空気が無償していく。

何事かと清明が簾を上げれば、先導役の蜜虫が口を開いた。

「誰ですか？」

「清明様にお客人です」

「もしや、桜法師殿かい？」

「あゝ」

領いた蜜虫の背後から、黒い衣をまとった老法師がぬつと出てきた。

かなりの巨漢だ。天を衝くような大きさはその肩に留まる大鷲と、首元に絡みつく大蝮の威容に少しも負けてはいない。

なので脇に立つ女童の小柄さが、より際立つて見えるのも無理はないことだった。

「この度は、我が式神たちがとんだご迷惑をおかけしてしまつたようで。大変に申し訳（ご）さいませんでした」

「私からも切にお詫びいたします。そして此度の一件を収めていただきありがとうございます
いました」

老法師と女童が揃って頭を下げた。まるで親子のようにも思える姿だ。

牛車からふわりと降りた清明は、そんな二人の前に立つた。

「どうぞ、顔をあげてください。此度の一件は労の内にも入りませぬ。ただしいくつか聞きたいことがあるので、よろしければ私の屋敷の方でゆるりと語るのはどうでしょうか」

「それは——」

「よろしいのですか？」

戸惑う老法師を他所に、女童の方が訊ねてきた。

主従としては老法師の式神だろうに、随分と行動力がある。

「構いませぬ。このようなどころではなんですからね。ああ、よければ酒なども一緒にどうぞでしょう」

「では、是非にでも伺わせていただきましょう」

今度は老法師の方が答え、桜法師と桔梗は徒歩かちにて牛車に同行したのである。

場所は戻って、清明の屋敷だった。

庭に用意された簀すのこ子の数は三つだ。清明と博雅は慣れたように腰を掛けたが、桜法師こと枝垂は一向に座そうとしない。

老法師は躊躇いがちに桔梗を見て、そちらが頷いたところでようやく座ろうとしたところだった。

「ああ、言い忘れていました。今更隠す必要はございません。どうぞ、楽になさってください」

「……なるほど、清明様ほどの方ならとうにお見通しでしたか」

そう告げた清明の視線は、枝垂ではなく桔梗の方へと向いていた。

桔梗はほう、と息を吐くと、かんねんしたように簀子の上に正座した。枝垂はあたかも従者のように脇に立っている。

大鷲と大蝮は、既に清明の庭の好きなどころに留まっていた。

「おい、清明よ、どういふことだ？」

「見ての通りさ」

「そう言われてもな。おれには式神のはずの桔梗殿が簀子に座ったこと以外——」

言いかけたところで、博雅は口を閉じた。

枝垂と桔梗を何度か見比べ、それから近くに座している蜜虫へと視線をやり、

「あつ」

と、驚いたように目を見開いた。

「ようやくわかったか」

「つ、つまり、法師と式神は本当は逆だったという訳か。桜法師と呼ばれる枝垂殿は実は式神で、式神と考えていた桔梗殿が本物の法師だと」

「そういうことさ。ある程度の力の持ち主なら、式神に法術を使わせることも出来よう。逆に自らは普段から式神として振舞い、直接怪異を解決する際にだけは現地へと赴く。こうすれば誰も——少なくとも術を知らぬ只人には桜法師の正体であることに気が付くまい」

「おい、清明。それはおれに言っているのか」

「いいや、言うてはおらんさ」

そのやり取りを眺めていた桔梗が上品に笑った。涼やかな目が細められる。

「清明様と博雅様、仲がよろしいのですね。お噂はかねがね聞いておりましたが、とても良きお方です」

「前にもお話しはしましたが、何故わたしの名前も知っておられるのですか？」

「当然です。この都でも随一と名高い笛の名手、源博雅様の評判もまた知っておりますれば。この前はとんだ無礼をいたしました、お許しください。あなた様ほどの方を前に、我が拙い筆箒を披露するには恥ずかしくて恥ずかしくて……」

「ああ、いや、お気になさらず。しかしなるほど、そういうことだったのか……では桜法師を二人見たというのは」

「おそらく、その枝垂殿は桜の精なのだろうよ。花の精である蜜虫と同じように、本体はもつと小さいはずさ。ならば後は、あの大鷲にでも運ばせれば京を横切ることも難しくはあるまい。諸正殿の身体はちようど、硬い樹皮のようになっていたからな」

「左様でございます。枝垂は百年生きた桜の大樹の精なれば、人の形を結ぶも解くも自由自在。これを目撃してしまったのはわたしの不徳ですが……いつそう桜法師の名声も高まり、ならば良しと利用してしまつたものでして」

照れくさそうに桔梗が微笑む。

月光に濡れるその姿は、年相応の幼気さと不釣り合いな艶やかさを両立させていた。匂い立つような桔梗の香りが、風に乗ってふわりと広がる。

「なぜ、あなたは女性の身でありながら陰陽師などを？」

「わたしは生まれこそ、この地の北にある山中なのですが、生まれて数年後より母の手で播磨へ向かう旅人に預けられました。今にして思えば生活に貧していたのでしよう、恨む気はございませぬ。そうして辿り着いた播磨の地で、きまぐれにも女のわたしめにも天地の理を説いてくださった師と出会ったのです」

この時代、女性が陰陽師になるのはあまりに難しい。

現代でいうのなら、男性が巫女になろうとするようなものだ。例え素質があろうとも、しきたりと世間の風習がそれを許さないのである。老法師の姿を取る枝垂を矢面に立たせていたのも同様の理由だろう。

だから、桔梗の語る師というのは紛れもない奇抜な人物に他ならないのである。

「そうして生きるための糧を教わり、死に瀕した師より三の式神を賜り、このように京へと戻ったのです。大蝮おおまむしの牙磨きはまろ、大鷲おおとりの風丸かぜまる、桜の精しだれの枝垂しだれ、どれもよくわたしを慕ってくださるのは幸いでしたが、あまりにその慕情が強いがために、わたしですら制しきれないのは考えておりませんでした……」

「諸正殿に襲われたあなたの報復に、式神たちが勝手に行動してしまつたのですね」

「はい。元よりわたしは気に留めておりませんので、彼らが報復に動いたのには驚きました。しかもわたしの制御を離れ、言葉を聞こうともしない始末。自らの未熟さを呪い、途方に暮れていたところで、清明様の手により彼らは戻つてきたのです」

「では、ここ数日姿を見せなかつたのは——」

「わたしだけで桜法師を名乗つたところで、果たして誰が信じましようか。我ら全てが揃つてこそその桜法師でありますれば、一人だけでは成り立ちませぬ」

「なるほど……」

博雅が呟いた。

いつの間にか蜜虫が瓶子から注いでいた酒を干しつつ、桔梗と枝垂を見比べた。

どちらが式で、どちらが人間なのか。博雅にその判断はつかないが、しかし言われてみれば、確かに枝垂の方がどこか浮世離れた雰囲気がある。

蜜虫と放つて気配が似通つているのだ。

「こうして都にて名をあげ、自らの存在を誇示すれば、いつぞやに別れた母とも再会できると考え、早二年が経ちました。どうやら現実はそう容易くないようで……自らの浅はかさを笑うばかりです」

——我が母、龍胆りんとうと顔も知らぬ父の残した犬たちは、今も元気でおられるでしょうか。

桔梗は一言、そう呟いた。

晴明と博雅は、なにも言わなかった——言えなかったのだ。

「なるほど、あの男の縁者であつたか……」

本当に小さな声で、晴明が納得したように言う。桔梗には聞こえていない。

あの男——晴明がそのように呼び指す人間は、一人しかいない。

いつか、内裏へと七晩かけて参上した牛のない牛車と、それに乗りたる鬼。彼女の名と、その目的は、確か、

「もしや晴明様、なにかご存知でありますか？」

「……いえ、わたしたちはなにも。ですがあなたならいつか、真まじとを見つけることでしよう」

「なるほど、晴明様がそう仰るのなら。わたしからはなにも訊きませぬ」

素直に桔梗は引き下がった。疑念はあれど、敢えて晴明を信じようとしているようだ。

会話の間が、空いた。簀子の間に春の夜風が吹き、花々の香りが広がる。

月光が草木と戯れ、静かに三人を照らした。

「それでは、改めましてこの度は世話になりました。このご恩、わたしは決して忘れはしません」

「そう畏まらなくとも結構です。ですが、恩があるというなら一つだけこちらから願いごとが」

「なんなりとお聞かせください」

「あなたの奏でる箏の音色は、素晴らしいものと評判です。その博雅も聞きたがるだけの代物、是非聞かせてもらえればと」

「おい、清明、良いのか？」

「おれは構わぬ。おまえが興味を持ったという音色、おれも聞いてみたいからな」

「我が箏でこの恩を返せるならば安きことでございますが……本当に構わないのですか？」

「もちろんです。どうか聞いてくださりますか？」

「では……」

覚悟を決めたような面持ちで、桔梗が箏を取り出した。よく使いこまれた、質素ながらもよい笛だ。

楽の音の才能と、鏡を用いた呪いの素質。それらは確かに、あの二人の娘に相応しいのだろう。

桔梗が息を整えている間に、博雅が清明へと向き直った。

「ああ、そういえば。清明よ、なぜおまえはおれが箏を聞けなかった話をした時、『な

るほど、それで』などと言ったのだ？」

「簡単なことさ。式神は基本、主の命に忠実であるからな。それを断つた時点で何かあると考えるのは自然のことさ。とはいえ……」

「今回はわたしの未熟で、その常に当てはまらぬ事態を引き起こしてしまつた訳ですが。いやはや、齡二十にもなつて、これまでにない羞恥ばかり感じておりますよ」

月明かりにも分かるくらいに顔を赤らめながら、桔梗は筆筭に唇を当てた。

すると、筆筭の音が夜空へと立ち上る。高い音が、低い音が、草木へ走り、月の下で踊り明かす。

まるで音色に色がついているかのように、耳だけでなく目でも追つてしまふような香しい楽の音だ。

「すごいな、晴明よ……」

「おう、これは中々のもので」

博雅は目を閉じ、うっとりとして音色に聞き惚れる。

晴明は赤い唇に微笑を浮かべ、静かに言う。

蜜虫は笑みを浮かべて二人の前に酒を注ぎ、枝垂は静かに佇んでいた。大蝮と大鷲も、庭の片隅で大人しくなっている。

その間を駆け抜け、輝く月にも負けじとばかりに、桔梗の奏でる音色はいつまでも響

いているのだった。

続、むしめづる姫・上

季節は、夏――

梅雨も明け、いよいよ立ち上る熱気を肌で感じる頃だった。

朱雀大路の一角にある桜の巨木も、すっかり装いを変え、緑に覆われた枝葉が風に揺れ動いている。

さわさわ、ひらひら、さわさわ、ざあざあ……姿も音のない大気の流れが、桜の葉を通して見え、聞こえてくるのである。

巨木は不動でありながら、その枝葉たちは細やかに身体を震わせる。まるで身を駆ける風を歓迎しているようだった。

風に乗って昼の空へと広がる葉の香りは、いつそう夏を感じさせるもの。しかし、涼やかな趣さえも通りがかる者たちへ与えていたのだった。

太陽が真南より少し西へ落ちた頃。

いつものように桜の下に相談所を設置した桜法師の所に、風変わりな客人が訪れた。

「あなたが、噂の桜法師であるのかしら？」

やって来たのは、白い狩衣を着込んだ少年だった。烏帽子を被り、白い歯を可愛らしく覗かせている。

しかし、先の声は明らかに少女のものだ。よくみればその顔立ちも、女性らしい丸みと美しさを備えている。装いこそ男性のようだし、眉を抜いていなければお齒黒もないが、信じられないことに年頃の女性であるらしかった。

その人物は、後ろに二人の少年——こちらは間違ひなく男性だろう——を連れていた。一人は質素な衣に身を包んだ男童で、もう一人は目元を薄い布で隠した少年である。

明らかに、世の常識とはかけ離れた女性とその従者だった。

まずは、老法師の姿をした式神、枝垂が慇懃に答える。

「ええ、この枝垂めが桜法師でござりますれば、如何様なご用件でしょうか？」

「実は少々、相談事があるの。最初は土御門の安倍晴明さまを訊ねただけど、ご不在でいらして。そこで、前に晴明様が仰っていた桜法師を思い出したから来てみたのよ」

「それはまた、光栄でござります」

陰陽頭おんみょうのかみとして、宮中の出入りも許される安倍晴明と親交があるとなれば、なまなかな

立場の人間ではない。

実際、漂う気品や風格はやんごとなき身分の者のそれなのに、男装をして人前に堂々

と姿を現す様は少年の行いである。

しかも、目を隠した少年は常人とは気配が異なると、本当の桜法師たる桔梗は気が付いた。

よく隠れてはいるが、式神だ。それも、相当なものである。いったいどれだけ強い力を持った術者が拵えたのやら、桔梗は思わず目を見張ってしまふ。

とはいえ、客人をいつまでも立たせておくのも申し訳ない。それとなく簡素な椅子を進め、まずは挨拶へと入ったのである。

「改めまして、わしは枝垂と申すしがない法師なれば。そちらの名を伺つても？」

「わたしは、露子よ。このようならりだけど、もうすぐ二十にもなる女なの」

「露子姫といえば……あの、たちはなのさねゆき橘実之殿の娘で、虫を好むという」

「そう、その露子よ。お父様からは何度も、虫を追うのをやめて、宮中に入れるような女になれと言われているけどね」

四条大路の屋敷に住んでいる、橘実之の娘の露子は、風変わりな姫で有名であった。

虫を愛で、自らの手で飼育をし、その観察記録を付ける。見た事のない虫には自分で名を付け、どのように飼育すれば良いかを詳細に調べるのだ。だから彼女の部屋には、無数の虫たちの記録が山の様に積まれている。

特にお気に入りなのは烏毛虫かわむし——つまり、イモ虫である。どの種類が、どのような葉

を食べ、どんな蛹となり、どういった蝶へと羽化するのか。それらを調べ、まとめるのが面白いのだという。

口さがない侍従がなにを言おうとお構いなし、むしろ巧みな弁舌で丸め込んでしまう始末だ。

器量は良い。この時代の基礎教養である歌集を誦んじ、筆を執ることも容易い。虫を愛でることをやめ、年齢に相応しい化粧を施せば、すぐにでも良い縁談は舞い込むだろう。

しかし、当の本人は今のまま変わる気配がない。父が何を言おうと我が道を往き、故に知る人ぞ知る姫となっているのである。

桜法師の杖垂、いや、正確には桔梗もこれくらいの情報は耳にしていた。

けれど、まさか露子姫その人が男装をして、自らの足で人前に姿を現すとは思ってこみなかった。

しばらく前に従者も連れずにやって来た博雅と同じ、珍しい類の貴人である。

「でも、宮廷なんて窮屈なところはご免だわ。それよりも、こうしてお屋敷を抜け出して、外を歩いて新しい発見をする方がとても素敵だもの」

「左様ですか」

「ええ。例えば、その大きな蝮はとても気になるわ。触らせてもらってもよろしいか

しら」

「どうぞ——」

桔梗の式神、大蝮の牙磨がゆっくりと机を上がり、露子の前で鎌首をもたげた。

常人ならばそれだけで恐れるだろう。六尺にも及ぶ大蛇が、自らの前で舌を出しているのである。怖がるな、という方が難しい。主の桔梗とて、慣れるまではおっかなびっくりだったのは否めない。

だが露子はいえ、目を輝かせて牙磨の頭を撫でたのである。

「まあ、可愛い。つい最近にでも、脱皮をしたのかしら。とても鱗が綺麗だわ」

「お気をつけてください。牙磨は大人しいですが、その牙には毒がありますれば——」

「知っているわ。でもこの子、本当に大人しいのね。首に巻いてみたくなるわ」

少しも恐れる気配がなく、露子は牙磨を撫でまわしている。

牙磨もまた、その手が心地よいのかされるがままになっていた。

とても女とは思えぬ丹力と、好奇心の塊である。さらに観察力と、それを活かす知識も豊富だ。風変わりな趣味といえど、ここまですれば尊敬の念を抱いてしまう。

「それで、ご用件とはいったい何でございましょうか？」

「ちようど、蛇のことなの。それだけなら良いのだけど、ちよつと変わったところがあつて」

「お聞かせください」

そうして、大嫂の頭を撫でつつ、露子姫は語り出したのである。

四条大路にある実之の屋敷に、奇妙な小包が届けられたのは、およそ二十日も前のことだった。

内訳は歌のしたためられた手紙と、ずっしりと重い絹の袋である。

どうやら露子宛に、さる上達部かんだちめの息子、平右馬之介たいらのうまのすけから贈り物であるらしかった。

この時代、貴族の男女の逢瀬というのは踏むべき段階が多い。

まず、女性は男性の前に姿を現さない。男性と知り合うのは、歌のやり取りが最初である。気の利いた歌のやり取りを繰り返し、いくらか良い仲になったところで、ようやく直に会うことができる。

だが、まだ素顔は見せない。姫の屋敷に招かれた男性は、御簾みす越しに女性と言葉を交わすのだ。声や話題、焚いている香の匂いを頼りに、どのような人物なのか想像を膨らませるのである。

そしてこの段階も終えてやつと、男女は直に会うことができるのだった。

回りくどい。だが、平安の奥ゆかしさと雅さがそこにはある。

時には、先んじて姫の素顔を一目見ようと、男性が屋敷の扉から覗き見ようとす。

もちろん、露見しないようにひっそりと。けれどももし相手に知られてしまっても、また歌のやり取り次第で面白おかしい話へ変わったりもするのだ。

この点を踏まえれば、右馬之介から露子に贈られた品はこの時代の王道的手法と称して差し支えない。

“私はあなたに好意がありますよ”——そう告げているも同然だった。

これを一番喜んだのは、露子本人よりも父の実之の方だった。

「露子や、ようやくおまえにも想いを寄せる男性が現れてくれたようだね。これを機に、もう少し自らの振る舞いを改める気はないか？」

親心としては、やはり自分の娘には良い人の下へ行き、幸せになつてもらいたい。

容姿も教養も人並み以上なのだから、本当はもつと早くこのような話が来ていたはずなのだ。

だから待ち望んだ男性からの贈り物に実之は喜ぶものの、当の露子は冷静だった。

「あら、お父様、まだ中身も改めていないのに喜ぶのは早いのでは？ 実は揶揄いのお手紙と、おかしな贈り物かもしれないのだから」

「そんなことを言うでない。ともあれ、まずはどのようなものか拝見しなくてはな——」

今でいえば、研究者のごとき振る舞いも多い露子である。言葉の方も論理的であった。

などという父娘のやり取りがあつて、手紙の方を露子が、絹の袋の方を実之があらためたのである。

手紙の方が、やはり露子へ向けた歌がしたためられていた。

試しに声に出して読んだ露子は、破顔した。

「はふはふも きみがあたりに 従はむ

長きこころの 限りなきみは

まあ、面白い歌だこと。このようなお方もいるのね」

“ 自らは這いながら、それでもあなたに従いましょう。私の心は長く変わらないのですから”。

およそ、そういった意味合いの歌であつた。

かなり強い恋慕の情を表している。と、同時に、虫好きの姫に合わせた面白さも含まれていた。

中々に風流で面白みのある男であるようだ。

「はて、いったい何が入っているのか」

同じように実之が袋を開ければ、そこにいたのは、なんと蛇であつたのだ。

実之、思わず悲鳴を上げて袋を放り投げてしまった。何事かと露子も袋を見やり、中から飛び出た蛇に目を丸くした。

「あら、そちらの袋には蛇くちなわが入っていたのね」

「露子や、迂闊に手を出してはならぬぞ。蛇は毒を持つ故な」

「蛇は蛇でも、皆が毒をもっている訳ではなくてよ。でも、随分と変わった模様をしているわ……」

蛇は見た事もないような優雅な模様をしており、袋から出た首を上下に持ち上げては落としてを繰り返している。

すぐに好奇心に任せてその蛇を観察しようとにじり寄る露子だが、さすがに娘に蛇を触らせる訳にはいかない実之である。

かといって、他の侍女に頼んだところで悲鳴を上げて逃げられるのは分かっている。誰もが露子ほど生物に興味があるわけではない。

だから父として、勇敢に自ら露子の前に出た実之であったが、すぐにその正体に気が付いた。

「おや、この蛇、よくみれば偽物ではないかね？ ほれ、この蛇の皮は着物の帯よ」

手に取ってみれば、どうやら袋に入っていた蛇は本物ではなく作り者であるらしかった。

ちょうど、帯の模様が蛇皮に似ている。さらに目玉のような意匠もあり、それが一見して蛇と思わせる。

しかも、帯の中には簡単な細工まで入っていた。これが先端部を動かして、あたかも頭を上下させているように思わせたのだ。

悪戯も、ここまで手がこめばいつそ清々しい。むしろ露子の性に合わせたと感じられて、実之としては好ましい。

「本物でないのは残念だけれど、良い趣味のお方ね。先の歌も、この蛇とかけていたのかしら」

「風情のある方から見初められたようで、わたしは安心しているよ。早くお返事を書いてきなさい」

「はい、お父様」

と、一応は素直に従った露子姫であったが、まさか素直な返歌を送るはずもない。

さっそく筆と硯を用意し、紙に歌をしたためた露子であったが、これもまた常識外れの塊だった。

まず、紙が分厚い。ごわごわとして、滑らかさとは程遠いのである。

さらに文章も、優美なひらがなではなく、厳めしい片仮名を用いていた。これでは、まるで男性が書いたかのである。

当然ながら、世の貴族女性はやらない。だが露子はそれを平気でやってしまうのだ。

「また、そのようなことをして……せつかくのお方が、これでおまえへの気持ち損なっ

てしまったらどうするのだね」

「もしそうなれば、その程度のお気持ちだったという話でしょう？ そのような方の心
を捕まえるより、私は虫や万象よろずのことを探求していたいもの」

「だがなあ……まあ良い、それで、なんとお書きしたのかね？」

「契りあれば 善き極楽に 往きあはむ

待つはれにくし 虫の姿は

これで怒るような方なら、わたしは興味なんてないの」

“もしご縁があるなら、天国で改めてお会いしましょう。蛇のお姿では付きまとうのも一苦勞でしょうから”。

およそこのように、露子は返すつもりであった。

相手の男を袖に振ったも同然の返答である。

とはいえ、露子らしい面白さと、相手からの贈り物にかけた気の利きようはある。

それに露子の言うことも一理ある。この返歌の常識外れぶりで辟易しては、夫つまとして並ぶことは不可能だろう。

ならばもうどうにでもなれと、実之は家の者にこの返歌を右馬之介へと送らせたのだが、これが右馬之介にはたいそう受けたらしい。二日後にはもう、さらなる返歌を添えた贈り物が届いたのである。

だが、今度の贈り物は、本当に生きた蛇であったのだ。

かなり大きな、青大将である。毒はなく大人しいが、外見だけでも恐怖心を覚えてしまふ。

これには実之もさすがに腰を抜かしたし、家の者や露子の侍女は近寄ろうとすらしなかつた。

唯一、露子だけは平気な顔で近づくと、

「あら、可愛い蛇ね」

平然と笑つて、その青大将を手に取つたのである。

そのまま青大将は庭に放たれ、露子の新たな観察対象として屋敷で生きていくことになつたのだ。

これには誰もが参つてしまつたが、露子だけは喜ぶ有様だ。虫取りの共としてよく一緒にいる、子供たちも恐れ知らずだつた。たいそう喜んだ露子はすぐに返歌をしたため、意気揚々と送り返したのである。

それから三度、右馬之介からは贈り物と称して歌と蛇が贈られてきた。どの蛇も活きがよく、また小気味よい歌だ。

今でいえば、センスが良い。だが、同時に、贈り物に蛇を幾度と選ぶ考えは、センスが無い。

風変わりという点では、露子とも似ているだろう。だから余計に、この出会いに実は喜んだ。露子の方も、あるいはと考えだした矢先のことである。

右馬之介から、奇妙な蛇が届いたのである。

「奇妙な蛇、ですか」

ゆつくりと杖垂が問うた。

「そうよ。つい三日ほど前、また袋に入れられてたのだけど、これがとても不思議なの」
「どのような蛇でしたか？ よろしければ説明をしてもらえれば——」

「ええ、分かっておりますとも。実は、その蛇の絵を描いたのを持ってきているの。けら男、あの絵を見せてさしあげて」

けら男と呼ばれた、露子の従者が懐に抱えていた紙を、机の上に広げた。

そこに書かれていたのは、見事な蛇の絵であった。鱗の書き方、命あるものの躍動感、細やかな特徴まで、すべてが余すところなく描かれている。これを露子が描いたというのなら、素晴らしい才能だと評するよりない。

ただし、露子の言うように、この絵の蛇は明確に不思議なところがある。

本来一つだけのはずの頭が、何故か五つも存在しているのだ。

まるで胴体の途中から、さながら八岐大蛇のように、複数の頭が伸びているのである。

「頭が五つの蛇……これは、聞いた覚えがありませんね」

「そうなのよ。こんな蛇、誰も見た事もなければ聞いたこともない。まるで神話の中に出てくる大蛇のよう」

「確かに。しかし、そのような生物が袋に詰められ、一個人に贈られるはずもありますまい。となれば、妖しの類でしょうなあ……」

「でもね、この子、悪いことは一つもしてないの。わたしが触っても大人しいし、誰かを襲うこともない。好き嫌いもなくてすぐく色んなものを食べるから、見ているこつちが面白くなってしまうのよ。つい昨日なんて身体のお手入れもしたくらい」

「それはまた。ですが、あまり放置すればよろしくない結果となる可能性があります。ここは一つ、我が式神の桔梗をそちらへ寄越しましょう」

と、式神の枝垂が主の桔梗を紹介した。

桔梗は慣れた様子で頭を下げる。このようなやり取りや振る舞いを、もう二年は続けているのだ。慣れたものである。

露子は「まあ」と声をあげた。

「あなたが、桔梗様ね。清明様からお話は伺っておりますが、直に会うとまたお綺麗なひと」

「どうぞ、桔梗とお呼びください、露子姫。仮にも式にそのような敬称を付ける必要はあ

りませぬ」

「でも、私はあなたのことを知っているわ。晴明様から、良いお友達になれるかもと言われてますし」

「むう……そのようなことを、晴明様が」

これには桔梗もたじろいだ。まさか、そこまで話を通っているとは、想定外だった。

晴明の性格からして、言いふらしたりはしないだろう。だから純粹に、露子への善意なのは分かる。

しかし、こうも先手を打たれてしまえば、驚いてしまうのも無理はない。

「女の身で陰陽師だなんて、確かにわたしのようね。なんだかあなたとは仲良くなれそうよ」

「それは光栄です。ですが、どうかこのことはご内密に。あまり広まってしまえば、日銭を得るのも難しくなってしまう故……」

「もちろん、分かっていますとも。よろしくね、桔梗様」

「こちらこそ、どうぞよしなに。露子姫」

「姫なんて付けなくとも、露子でけっこうよ」

「わたしも、桔梗様などと畏まらずとも結構でございます」

「露子よ」

「桔梗です」

二人して言い合い、顔を見比べた。たまらず、笑い合ってしまう。屈託のない笑みだった。

どちらも、同じ年代の同性の友人は、これまでいなかった。変わり者として生きてきたから、当然のことだ。

だからなのか、思ってたよりずっとすんなり、心の距離は縮まっていた。

「では、桔梗と呼ばせてもらおうわ。あなたも、露子と呼んでちょうだい」

「承知しました。人の目がないところでは、そのように呼ばせていただきます」

「うん、それでいいわ。それじゃあ、お屋敷の方に来てちょうだい、桔梗」

「行きましよう」

「行きましよう」

そういうことになったのである。

続、むしめづる姫・下

桜の木の下から、露子の屋敷までの道すがら、桔梗と露子は並んで歩いていく。

牛車は使わない。桔梗にそのような備えはないし、露子は自ら歩くことを苦としな
い。

露子の従者であるけら男と、目元を隠した黒衣の少年がその後ろをついていく。桔梗の式である大鷲の風丸が、その頭上を舞っていた。

桔梗の方が、露子よりも少しだけ背が小さい。そして今の露子は白い狩衣を来て、長い髪を烏帽子の中に隠しているから、さながら男性のようにも見える。

思わず道行く人がふり返ってしまうような、女性のごとく美しい男性——それが今の露子だった。

傍目からすれば、やんごとない貴族と、その愛人が昼間から逢瀬しているようにも思える。

しかし二人の間で交わされる言葉は、睦言とは程遠いものだ。

話題はちょうど、露子のもう一人の従者である、黒丸の話だった。

「では、その黒丸は赤蚕せきさんこ蟲なのですね。まさか蟲毒によつて生まれた式が、それほどまでに美しくなるとは。よほどあなたの心はお綺麗なのですね、御見せしました」

「黒丸が羽化したとき、もしわたしが誰かを殺してやろう、なんて考えていたら、きつとそのように行動していただろうと晴明様は仰つていたわ。だからそうならなくて良かったのだけど、そう銜いなく褒められるのも恥ずかしいわ」

珍しく、露子が照れたように頬を染めた。

黒丸——赤蚕蟲とは、多数のイモ虫を入れた壺に動物の血を注ぎ、最後に残った一匹を式とする蟲毒の呪いである。

法術というよりは呪術、呪詛の類なのだが、黒丸の様子からは微塵も負の印象は見受けられない。

それだけ、露子の純粋な心に感応したのだ。

「どのような経緯でその式を手に入れたかは存じませんが、どうぞお大事になさってください。なにかございますれば、この桔梗めがあなたのお力となりますので」

「ありがとう。そう言つてくれるだけでも心強いわ」

まだ出会つて一日と経つていないのに、二人の間には既に友情が芽生えていた。

「桔梗は、播磨からこの都へと来たようだけど、どうして陰陽師をやっているの？」

「それしか生きていく術が無かつたから、ですかね。どうやら、この天地の理に関わる素

質は、人並み以上であつたよう。特に筆筈と鏡を用いた術には、自信がありますよ」

「まあ、それは是非見てみたいわ！」

「お望みでしたら、すぐにでも」

そう言つた桔梗の視線の先には、立派な門と扉に囲われた屋敷がある。

露子の屋敷だつた。

懐から筆筈と鏡を取り出し、何やら一言二言唱えてから、露子へと向き直る。

顔には、不敵な笑みが浮かんでいた。

「これは想像ですが、おそらく露子は、この屋敷を無断で抜け出したのではありませんか？」

「あら、やつぱり分かつてしまふかしら。ええ、そうよ。そのけら男と黒丸以外、誰もわたしが抜け出したことは知りません」

「であれば、戻るのにもこつそりと、でしょう。良いですか、私が笛を吹いている間、誰も一言も喋つてはなりませんよ」

「え、ええ」

唐突な言葉に押されながら、露子がゆつくりと頷いた。けら男と黒丸も同様だつた。

さらに呪らしきものを唱えてから、桔梗はゆるゆると筆筈に唇を当てた。

微かな、されど明確に耳へと届く楽の音が、昼の大きに溶け込んでいく。

夏の空気と一体化して、消えるような、溶けるような……なのに、しつかりと音は残っているのである。

それから、おもむろに桔梗は門へと歩き出した。慌てて露子たちも着いて行く。

門の傍には見張りがいた。なのだが、近づいてくる桔梗にまったく気が付かない。どころか、露子たちの存在にも気が付かない様子だった。

息をひそめ、喋らずに門を通過していく露子たちを、門番は何処か呆けたような視線で見送った。

門を越えて、しばらく行った先の庭の木の影に隠れたところで、ようやく桔梗は筆筈から唇を離したのだ。

「いかがでしたか、我が法術は？」

「とつてもすごかったわ……！ 桔梗、あなたつとでも良い腕前の陰陽師なのね！」

「ありがとうございます。でも、私などまだまだですよ。この都には別格の方が多すぎますから」

「それでも、わたしにとつてはすごかったわ。今のはどうやったのかしら？」

「鏡を用いて、誰もいない門の様子をあの門番に見せたのです。それだけだと違和感を覚えられる可能性もあるので、笛によって少しだけ意識を乱します。これで、誰にも認識されずに門を潜れたのです」

「へえ……わたしには、想像もできない世界よ」

感嘆したように、露子が呟いた。

「では、首尾よく屋敷に戻ったところで、件の五つ頭を持つ蛇を見せていただいてもよろしいでしょうか？」

「こつちよ、着いてきてちようだい」

勝つて知つたる庭の中を、露子の先導の下で歩いていく。

庭の中には、露子によつて集められたたくさんのお虫たちがいた。

蜻蛉。

甲虫。

鍬形虫。

螳螂。

蝶。

他にも他にも――

多くの虫たちが、思い思い庭に息づいているのである。

だが、草木や水辺はよく整えられているから、雑多な印象を受けない。自然のままでありながら、見栄えもよい。そんな庭であつた。

「良いお庭ですね」

桔梗の口から、何気なしに賞賛の言葉が零れた。

露子はただ、嬉しそうにっこりと笑った。

その間に、一行は小さな池の傍へとやって来ていた。いったい五つ頭の蛇はどこにいるのか、桔梗が辺りを見回す。地面に蛇の這ったような跡はあるが、近くにはいない。

「本当にここなのですか？」

「ええ、そうよ。あの子はなんでも食べてしまうから、今頃は魚でも獲っているのではないかしら——」

露子がちょうどそう言ったとき、池の方から水飛沫が上がった。

見れば、水の中から蛇の頭が顔を出している。それが、五つ。緑の双眸を揺らしながら、桔梗たちをじつと見ているのだ。うち二つは、獲ったばかりだろう小魚を啜えている。

それだけなら、五匹の蛇が水中から身体を出しているだけにも思える。だが、蛇たちが岸へと近づくとつれて、その奇妙さが浮き彫りとなった。

水から露わになった頭たちは、根元が一つの太い胴に集まっているのだ。

まるで、神話の中から抜け出てきたかのよう。

露子が描いた絵そのままに、その奇怪な蛇はあたかも五頭龍のごとき威容を晒していた。

「なるほど、これがその奇妙な蛇ですか」

「五つ頭がある以外は、今のところ至って普通の蛇なのよね。よく食べて、よく寝るわ。でも、これが成長したらどうなるか分からないし、黒丸みたいに収まる保証だつてないから、相談を持ち掛けたの」

「賢明なご判断です。しかしこれは……」

戸惑った様子で桔梗は五頭の蛇を眺めた。明らかに困惑している様子だ。

その困惑が、ただ知らない生物に出会ったからでないことを、露子もそれとなく理解していた。

「なにか、心当たりでもあるのかしら?」

「……これはもしかしたら、鼠牛法師そぎゅうほうしの式やもしれません。いえ、だとしても、どうしてもそのようなものが露子姫の下へ贈られたかが分かりませぬが」

「鼠牛法師? お知り合いなの?」

「まあ、師匠の一人と言いますか、少々教えを請うたことがあります。もつとも通りの良い名は——」

言おうとして、桔梗は不意に口を閉ざした。

どうしたの、そう露子が訊ねても首を横に振るだけだった。

「あまり確証のない内から、その名を出すのは止めておきましょう。あの方は気紛れな

方ですが、果たしてここまで腰が軽かったかどうか、自信が持てませぬ」

「まあ、あなたも晴明様のように勿体ぶるの？ お楽しみは後に取っておく、というのも分からないでもないけれど、それでは答えがとても気になってしまいうわ」

「申し訳ありません。なにぶん、我ら陰陽師にとつて言葉とはもつとも身近な呪なので、不用意に言霊にしてしまえば、それだけで呪にかかるともありますゆえ」

「ふうん……分かった、それなら仕方ないわ。でも、この子の正体に心当たりはあるのね」

「それは、まあそうですね」

歯切れも悪く桔梗が答えてから、口元で小さく呪を唱えつつ五頭の蛇へと手を伸ばした。

すると、蛇は静かに桔梗の指に触れると、そこで大人しくなった。

桔梗は五つの頭を優しく撫でると、囁くように言う。

「露子姫の下で、もう十分にくつろいだでしょう？ あなたはあなたの主の下へ、速やかにお帰りなさい」

その言葉を、蛇は過不足なく理解したらしい。

しゃー、しゃーと呼気を漏らしながら、身体を這って進みだしたのである。

五頭の蛇はそのまま門の方へと向けて、草むらを這って行く。

「まあ、あの子はいつたどこへ向かうのかしら」

「これから嫌でも分かるでしょう。わたしはこれからあの蛇を追いますが、一緒にきま
すか？」

「ええ、もちろん。けら男、あなたはここで待っていないさい。もしお父様から訊ねられた
ら、桜法師と共にいると伝えてちょうだい」

「わ、分かりました。その、黒丸の方は」

「つれていくわ」

簡潔に答えてから、露子は桔梗と共に蛇の後を追いかけたのである。

五頭の蛇は門を出て、すぐに西の方へと向かいだした。

あたかも人目を避けるように、影から蔭へと蛇は進んでいく。その後ろを、桔梗と露
子、それに黒丸が追いかけていくのである。

やがて蛇は西の方の、破れ寺へと入っていった。屋根には草木が茂り、所々の柱は朽
ちて今にも倒壊しそうな佇まいだ。

その中へ、物怖じせずには足踏み入れる。この程度では怯むような可愛げ
など持ち合わせていない。

内部もやはり荒れ放題の様子だったが、そこには既に先客が二人いた。

一人は、白髪はくはつはっせん白髯はくはつはっせんの老人だった。襤褸のような黒い水干を纏い、黄色の炯眼をぎよろりと桔梗たちへ向ける。深い皺の刻まれた顔は鬼のようにも思えるが、どこか愛嬌を感じさせもする。

もう一人は、この場に相応しくない小綺麗な装いの青年だった。やってきた桔梗たちを見て、諦めたかのように息を吐いた。

床に寝転がっていた老人の方が、桔梗を見てにたりと笑う。

その手には既に、あの五頭の蛇が絡みついていた。

「ほう、この一件、わしは晴明が出張ってくるかと思うていたが……主が来たかよ、桔梗」
「……そうだろうとは考えておりましたが、やはりあなたでしたか、蘆屋道満さま」

その言葉に、道満は“ふん”と鼻を鳴らしたのである。

蘆屋道満の名は、この都においては知る人ぞ知る陰陽師であった。安倍晴明にも匹敵する術術を操り、噂では地獄との行き来すら自由自在だという。表立って依頼できないような薄暗い仕事も、道満ならば条件次第で簡単に受けてくれる。そういう男として、京の者には認識されているのだ。

だが、桔梗のような播磨の陰陽師にとっては他にも大きな意味を持つ。

道満は、播磨陰陽師たちを纏める者として側面もある。その影響力は計り知れず、播磨出身の法師は例外なく道満を慕っているとされる程だ。

それは桔梗とて同じだが、この場合は、もう少し意味が異なる。

「いつぞや、術を教えていただいた際に、あなたは戯れに式神をいくつか教えてくれました。その際に、あの五頭の蛇を見た覚えがありましたね。それでほぼ、道満様が嘸んでいると確信しました」

「くくつ、そのような些末事を覚えていたとはな。つくづく、主は抜け目のない奴だ」
くつくつと、愉快そうに道満が笑った。

その様子を、露子は目を丸くして見ていた。

「先ほど桔梗の言っていた鼠牛法師とは、もしや道満様のことだったのかしら？」

「ええ、その通りです。この方は時折、そのようなつまらぬ名乗りをするものでして。それよりも露子姫こそ、道満様とお知り合いなのですか」

「黒丸の件で縁があったの。それ以来、たまにお顔を合わせることがあるわ」

「なるほど、それでこれほどの赤蚕蟲を……謎が一つ解けましたよ」

「桔梗め、仮にも師を前にして”つまらぬ名乗り”とは、言うてくれるな」

ま、否定はせぬがな——道満は短く呟くと、横になっていた身体を起こした。

手で“座れ”と示してきたので、桔梗と露子は程よい距離を取って荒れた床へと腰を下ろした。

桔梗と露子、道満と青年で向かい合うような形になった。

最初に口を開いたのは、露子である。

「あなたが、近ごろお手紙と贈り物をくださった平右馬之介様でしょうか？」

「はい、その通りでございます」

右馬之介は頷いた。

その顔には、後悔と賞賛が入り混じった複雑な色が描かれていた。

だがすぐに覚悟を決めたような顔つきとなると、滔々と語り出したのである。

「最初は、ほんの出来心でございます。虫愛づる姫君のお噂をきき、どのようなお方なのかと、居ても立っても居られなくなってしまったのです。だから、少々驚かせてやろうとあの歌と作り物の蛇をお贈りしました」

「とてもよく出来ていたわ。わたしやお父様も、本物かと見違えたくらいなもの」

「そこで姫からの返歌をみて、いよいよわたしはあなたに心を奪われてしまったのです。ですが、どうしてもわたしは姫が虫や蛇に心奪われているのを我慢ならなかった。なればと本物の蛇を贈っても、姫はより喜んでしまう始末で……勝手なことながら、わたしは途方に暮れてしまったのです」

為人は良いのに、どうしてもその趣味が理解できない。

だからと虫嫌い、蛇嫌いになってもらおうとしても、まったくの逆効果である。

困った右馬之介であったが、そんな時に道満と出会ってしまったのだ。

「そこで、このわしが偶々関わってしまったのさ」

道満が言った。

「なにやら面白い悩みをしているようだから、酒を対価に聞いてやればあの橘実之の娘の話ではないか。これは愉快と思うてな、とある式を差し向けることにしたのさ。我が赤蚕蟲すらてなづけた露子姫ならば、まさかあれらが無碍に扱うこともないだろうとな」

「あの奇怪な五頭の蛇を見れば、さしもの姫も恐れてしまうだろうと、わたしは喜んであなたへ贈りました。ですが……どうやら、その様子ではまったくそうはならなかったようで」

「とっても素直で可愛い子たちだったわ。あと一日お家にいたら、名前も考えてあげようと思っていたのだけれど」

「なるほど……やはり、あなたの御心は変えられなかったようだ」

「だから言うたのになあ、右馬之介よ。あの姫を虫嫌いにしてしまうなど、生半可なことでは不可能だと」

「ならばどうして、道満様はこのような余興をなされたのです？ まさか、本当に酒の対価だともっ？」

桔梗からの問いに、くつくつと道満は笑う。

露子と右馬之介を二人だけで話させながら、自分は桔梗の方を向いた。それから、右肘を膝にのせて頬杖を突くと、面白そうに言うのだった。

「退屈しのぎが一つ、露子姫は風変わりな方だからな。その動向を見るのはよい暇潰しじゃ。酒の礼が一つ、元よりこやつと思惑が叶わぬとは分かっておつたが、それで止めようとするにも見えなかつたのでな。最後に、たまには式の機嫌もとつてやらねば、大事な時に反抗されても敵わん」

特に、こいつの場合はな――

そう言つて、道満は五頭の蛇を優しく撫でた。

いや、五頭の蛇はもうそこにない。道満が撫でているのは、肌色をした、男性の右手首であるらしかった。

「五本の頭は、それぞれ指を表していたのですね」

「おうよ。我が式の中でもこれは特別の品ぞ、なにせかつて朝廷に弓引いたあの男の右手首であるからな。そこらの陰陽師にでも差し向ければ、立ちどころに喰らうてしまうだろうさ」

「そのような恐ろしいものを、よく露子姫に贈りましたね」

「言うたであろう、姫ならばまさか無碍に扱うまいと。手荒にされればどうなるかは分からぬが、見よ、この姿を」

道満がその右手首を差し出してきた。

人の手が、それだけで生きているかのようにならぬと動いている。

不気味だが、どこか愛嬌もある。まるで喜んでいてるかのようだった。

「よほどしつかり世話をされたらしい、わしはそのような些末事はしない故な、よい息抜きになると考えたのさ。こやつも随分と上機嫌よ」

「……なるほど、そのような理由がありましたか。道理で、簡単にこの場所が分かったはずです。もし道満様の本気であるのなら、わたし程度ではとても太刀打ちできなかったでしょうから」

「主は素質こそあるが、経験がまだまだ足りぬな。人の世に飽かねば、この天地の法は見えてこぬぞ——」

それから、道満は何かに気が付いたように頭を掻いた。

どこか照れたような、考え違いを披露するように呟く。

「てつきり晴明が出てくると思うて酒をあてにしていたが、桔梗が相手では酒は望めぬか。これは参ったな……」

「ああ、酒ならばここにありますよ」

「な……」

怪訝そうな道満の前で、桔梗は小さく口笛を吹いた。

空から、翼のはためく音がした。

見れば朽ちた屋根に開いた穴から、一羽の大鷲が飛びこんできたのである。

桔梗の式神、風丸であつた。

その爪には栓のされた瓶子が一本、吊り下げられている。

「蛇の怪異を払うなら、大鷲の風丸を用いるか、はたまた孔雀明王くじゃくみょうおうの陀羅尼だらにか、それとも素戔鳴尊すさのおのみことに倣つて酒で酔わせる手法が良いかと考えておりましたが、どれも使わずに終わつてしまいましたので。いかがですか？」

「くくく、気が利くではないか。酌をしろ、桔梗」

「はこ」

道満から差し出された器かわらけに桔梗が酒を注ぐ。

それを道満は上手そうに干してから、唇の端についた酒を舐めとつた。

「甘露……良き酒ではないか」

「秘蔵のものであつたのですがね。まあ、道満さま相手なら仕方ありませんね」

「ではこの酒の肴は、そちらの二人で決まりだな」

道満の見やつた方では、露子と右馬之介がまだ話をしている最中だつた。

「ごめんなさい、わたしは虫を愛でる心を変えることはできないの。もしあなたがそれを止めさせようというなら、あなたとはお付き合いできないわ」

「……それは、とても残念です。ですがこうして姫を直に見て、思いましたよ。やはりあなたは、とても綺麗なお方だと。そんなあなたに相応しい男性は、誰もいないことでしょう。このわたしを除いて、ですが」

「まあ、御上手ね」

楽しそうに露子が笑った。

右馬之介もつられて、顔がほころぶ。

道満はその光景を肴に酒を飲み、桔梗も微笑みながら酌を続けた。

五頭の蛇ならぬ、五指の手首は、そんな桔梗たちの周囲を楽しそうに走りまわっていた。